〈青森県史〉の窓 14

シブド（囲炉裏）の話

清野耕司
（県民生活文化課県史編さんグループ）

かつての青森県内では、家族の居間であり、炊事や食事の場でもあった部屋をダイドコロ・ダイドコ・デェドコ・デンドコなどと呼び、必ず囲炉裏が切られていた。囲炉裏はシブド・シボド・シブト・ヒブトなどと呼ばれ、新しくはロ（炉）ともいった。

家にもよるが、シブドはダイドコのドマ（土間）寄りにあり、南部でカギヅキ、津軽でカギノハナという自在鉤が下げられ、飯を炊きオツユ（味噌汁）を煮たり、ヨセガマ・テドリガマで湯を沸かしたりした。上にはシダナ（火棚）がつるされ、冬には濡れたツマゴ・ワラグツなどを上げて乾かした。シダナには、ベンケイと呼ばれる30センチほどの長さの巻藁が下げられ、串に刺して焼いた小魚などを薫製にするために刺してあった。ベンケイとは、弁慶が七つ道具を背負った姿に、また合戦で体中に矢を射立てられた姿に似ているところから付いた名とも言われている。

また、シブドで使った道具類の中には「小女房」という風流な名前を持ったものもある。江戸時代の紀行家菅江真澄は、現在の下北郡東通村を訪ね、泊まった夜の様子について「…くるれば、松の火、たてあかしのやうにかがやかし、女、（中略）などいひて麻衣うつに、くらければ、男、手斧とりて、小女房てふ株のやうなるものに松のせてうちわり、そへあかしぬ。」と書いている。『青森県史民俗編資料南部』には「大きなかまどの炊き口の傍、ダイドコ寄りのところには、コニャブ・コニャボウ・コンギャボウなどと呼ばれる薪割り台が据えられていた」とある。青森市郊外では、シブドのニヤ（作業用の部屋）寄りに据えられた薪割り台の名前をクネボウという。つまり、小女房とは、太い根株を利用して作る、薪割り台のことなのである。

さて、家族がシブドを囲んで座るときに、場所が決まっており、座の名前もあった。奥を背にして上手が主人の座る場所で、ここは県内どこでもヨコザと呼ばれていた。その他は、主婦の座るカカザ、客が座るキャクザ・オトコザ、ヨコザの対面で薪を置いたり子ども達が座るキジリ・キシラ・キシラマなどという。ヨコザは主人の座として厳重に守られ、たとえ本人が不在でも、それ以外の者が座ることは許されず、子どもが座って叱られたという話も珍しくはない。下北地方では、ヨコザに座った他家の者が「おまえは、その家に米を買ってやらなければならない」といわれたことがあるという。ヨコザに座るということは、その家の主になったも同然ということであろうか。

ヨコザに座る父親が、怒れば恐いが、威厳と慈愛に満ちあふれ、家族の絶対的な信頼と尊敬を集めて、一家を支えていたころの話である。

囲炉裏のある部屋（三戸郡新郷村）